

トゥデーラのベンジャミンの旅書簡 (4)

—バグダードとメソポタミア—

関 根 謙 司*

Abstract

Benjamin of Tudela, a medieval Sephardic merchant, traveled all over the Mediterranean world including both Christian areas and Moslem ones. The twelfth century of his lifetime was not only the magnificent times where the international commerce would develop but also the intolerant times where one did not permit other religious. Especially in the Christian European world, the Crusade was organized against the Islamic world, the cathars, and also the Jews. Proceeding the Reconquista in the Christian Spain, Benjamin, born in Tudela after the success of Reconquista of Navarra, was visited many Jewish community from 1159 or 1160 to 1173.

He wrote many documents in Hebrew about many Jewish communities in many towns and cities where he was stayed. Writing in Barcelona, Narbonne, Lunel, Marseille, Pisa, Lucca, Roma, Salerno, Taranto, Orie, Otranta, Thebes, Salunki, Cyprus, Antioch, Beirut, Tyre, Haifa, Nablus, Jerusalem, Askalon, Tiberias, Damascus, Aleppo, Baghdad, Sura, Pumbeditha, Khuzestan, EL-Cathif, Cairo, Gizeh, Alexandria, Messina, Palermo and Tudela, his documents changed a famous travel book titled *Sefer ha-Massa'ot*.

On my article (part 4) here, I translated and summarize his travel book into Japanese from Hebrew. And I tried to approach his living times, and to realize checking from other historical documents and studies. On the part 4 I treated Baghdad and Mesopotamia places under Islamic rules, and will treat the last chapters such as Gulf, Egypt and Sicily in the next article (part 5).

Key Words : Benjamin of Tudela, Medieval, Sephard, Sefer ha-Massa'ot, Hebrew, Islam, Mesopotamia, Baghdad, Kufa, Sura

Documental letters of Benjamin of Tudela (4) —Baghdad and Mesopotamia—

*Kenji Sekine

Correspondence Address : Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University,
196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-Gun, Saitama 356-8533,
Japan.

Accepted November 12, 2003. Published December 20, 2003.

10. バグダード滞在

12世紀、50万から100万の人口をかかえて都市が発展していた地域があった。長安、デリー、バグダード、カイロ、コルドバなどがそれらであると想定されている。当時、ヨーロッパ最大の都市はヴェネツィアであり、ローマ、トゥールーズがそれに次いだ。それでも人口は10万前後であったとされる。中世の著名都市を歩くと、意外に小さいのに気付く。歩くとすぐ城壁に辿り着く。エルサレムやマラーケシュは他の都市と比較して、なかなかの規模だ。パリのブルヴァール (Boulevard) がかつての城壁のあった場所に作られたと思うと、なかなか大きいほうである。中世の城壁都市は円形に広がる傾向をもっている。都市は計画的に作られるが、散発的に人口過剰をもたらす。

バグダードはアッバース朝第2代カリフのマンスールによって建設された人造都市であった。チグリス川に面した農村にカリフは大帝国にふさわしい都市を建設することに着手した。それまでの都市を改造するのではなく、ほとんど寒村に過ぎなかったバグダードをカリフは「平安の都」(Madīna al-Salām) と名付け、首都に定めたのである。アッバース朝を開くのに大きく貢献したホラーサーンのペルシャ人を雇用していくのにも、また交通路として2つの大河であるチグリス川とユーフラテス川を活用できることは立地条件として申し分がなかった。円形の都市を作り、4つの城門をもち、城門の外では市場が活況した。それはトゥデーラとは比較にならぬ規模であり、驚きであったはずだ。バビロン捕囚以来、ユダヤ教徒にとってはメソポタミア、とりわけスーラとブンバディテを抱くメソポタミア北部は望郷を募らす地域であった。イスラム都市として活力ある生活を送っていたバグダードをベンジャミンはどのように記述しているのだろうか？

バグダードは大都市であり、ムハンマドの血縁であるアッバース家の信徒のアミール【訳注：カリフのこと】の王宮があるところだ。信徒のアミールはイスマールの子孫【訳注：アラビア半島の遊牧民のこと】たちの宗教【イスラム教のこと】の首長である。イスマール教のすべての王が信徒のアミールに忠誠を誓っている。キリスト教の教皇のようなものだ。[lamed-hē]

ベンジャミンが小アジアに滞在していたのは、1159年から1170年にかけてと想定されている⁽¹⁾。とすると、アッバース朝のカリフは、アル=ムスタンジドの時代でということになる⁽²⁾、小王国分裂時代のスペインに生きたベンジャミンは、カリフを信徒の長として正確に理解していたことが分かる。

ベンジャミンのバグダード滞在記録は、歴史から隠された生活文化史の史料として⁽³⁾、半世紀

後のユダヤの旅行家レーゲンスブルクのペタヒア (Petachia von Regensburg) よりも評価は高いとされてきた。⁽⁴⁾ カリフとイベリア半島のムスリムのアミールをきちんと区別していたのは驚きである。その正確な記述の典拠は謎といえは謎である。というのも、旅行記はしばしば誇大妄想にかられた記述が散見される傾向があるからである。ベンジャミンの旅行記は、マルコ=ポーロがジェノヴァの監視人たちに語ったものとはずいぶん性格が異なるし、イブン=バットゥータが半世紀近くにわたる記録を記憶と想像で喋りまくり、イブン=ジュザイが聞き書いたものとも異なる。驚くほどの正確さだが、中世人らしい荒唐無稽な脚色がないことにも驚く。

(アミールは) バグダードの中心に3ミッリームの広さの宮殿をもっている。宮殿の中央に大きな庭園があり、そこでは世界中のあらゆる種類の木々や果物や実のない果樹で満たされている。家畜も育てられている。庭園の中央にはヒデカル川【訳注：チグリス川のこと】の水を引いて水浴び場が作られている。アミールが散策したり、庭園を観て回るときはお付きの者が鳥や魚を捕らえ、王子たちや家来を連れ立って宮殿にもち帰るのである。中には偉大なアミールもいて、ハーフィズ王はユダヤ教徒にたいそう友好的で、ユダヤ教徒の家来を従えている。[lamed-hē]

イスタンブル滞在と同様、バグダード滞在は長期にわたったことが推定される。記述が詳細を極めているのはその結果と思われるが、それだけに留まるものではない。宮殿の描写は第三者からの情報だけでは記録できなかったと推定されるものも含まれているからである。カリフがユダヤ教徒を重用していたことから推察すると、宮殿に出入りし、各地で見聞した情報を知りたがっていたカリフの宮殿に、おそらくベンジャミンも出入りを許された1人であったのであろう。

メソポタミアやペルシャのユダヤ商人はラーダーニーヤ (rādānīya) と呼ばれ、⁽⁵⁾ 経済的にも政治的にもイスラム世界を指導する家系であったことはよく知られている。アラビア語で多くの地理書や旅行記を残したイブン・フルダーズベもラーダーニーヤの出身であり、父親はタバリスターンの総督でもあった。土地に見合った地租税 (kharāj) を徴収するためには、実地調査が欠かせない。イスラム世界の地理書が地租税のために活用されたことはよく知られているが、旅行記はいわば基礎報告の役割を果たしていたはずだ。ラーダーニーヤたちはアラビア語、ペルシャ語、ロマン語 (ラテン=ギリシャ語のこと)、フランク語、スペイン語、スラブ語に通じていたことが知られており、各地を不自由なく旅行することができた。キリスト教世界からは宦官、女奴隸、少年奴隸、錦織りの布地、ビーバーの皮、てんの毛皮、他の毛皮類、刀剣などが運ばれてきた。首都バグダードは各地からのものが集まる場所であり、東方からはインドや中国の商品も多かった。ラーダーニーヤがもっとも活躍したのは9世紀であるが、メソポタミアがユダヤ商人の格好の活躍場であったことは12世紀も変わらない。ラダン (radhan) とはペルシャ語で「道を知ること」の意味があり、語源は不明とされる。商業ルートに

通じていたための呼称で、イベリア半島でもイスラム侵攻以前からラダン人として知られていた。

カリフは数ヶ国語に通じ、ユダヤの律法にも通曉していた。トーラーの言語【訳注：ヘブライ語のこと】も読み書きできた。どんなことも自分の手を使って作ることを望んだ。船出するときの帆も自分の鋏で作った。家臣はそれらを市場で売った。(中略) カリフは誠実で信心深く、万人の平和を力説していた。カリフの姿を見かけるのは年に1回しかなかった。遠方から集まってきた巡礼者はイエメン方面にあるメッカに向かう。〔lamed-hē〕

バグダードの滞在記録は詳細を極める。ベンジャミンのバグダード滞在記録はイスラム世界の生活誌になっていることでも高く評価されている。⁽⁶⁾ ベンジャミンの記述から窺えることは、トゥデーラというレコンキスタの渦中にいながら、イスラムに対する偏見も敵意も感じられないことである。これはエルサレム滞在の記述からも窺えるもので、往時のユダヤ教徒の対イスラム観の1つを窺い知ることができるのも興味深い。

(中略) カリフの宮殿には、銀や金で飾られた大理石の大浴場がある。壁には彫刻や貴金属が組み込まれている。カリフの宮殿には富が集まり、塔は金や絹の布地や貴金属でいっぱいである。カリフは年に一度、ラマダーン明けのお祭り【訳注：イード＝アルフィトルのこと】のときだけ宮殿から出てくる。この日、カリフを見ようと遠方から人々が集まる。カリフはラバに乗り、金銀が刺繍された、細かいリンネルの服を身にまとう。頭は王位の印である貴金属いっぱいのターバンを被っている。ターバンの上の方には尊厳さを表す黒い肩掛けをかけている。それは最後の審判のときにあらゆる栄誉が覆われることを暗示している。カリフには豪華な衣服を身に着けた家臣たちがお供している。その中にはアラビア王、トガルマ王、ダイラム王、ペルシャ王、メディア王、グズズ王さらにはチベット王もいる。チベットはサマルカンドの西にあり、ここからは3ヶ月の旅程である。カリフは宮殿からバスラ門のそばにある大モスクに向かう。〔lamed-vav〕

ベンジャミンのバグダード滞在記は詳細というだけでなく、描写は生き生きとしている。このことから、バグダードの滞在は数年間に及び、バグダードを拠点にあちこちに行き来していたことが想像される。ベンジャミンが詳しく記録している町が当時のユダヤ商人が活躍したところであったことから、ベンジャミンを商人だとする見解は少なくない。⁽⁷⁾ ところが、ベンジャミンの職業を限定できる記述は驚くほど少ない。あくまで、推定材料であり、状況材料ではない。

ベンジャミンはキリスト教世界にあっても、イスラム世界にあっても、小さなユダヤ社会を

(8)
 見つけることに長けていたという見解がある。1家族しか住んでいなくても、小さなユダヤ社会として訪れていたと思われる。見聞にしては、具体的であり、事実在即しているものが少なくないからである。それでも、博識のベンジャミンにしては誤解、誤記が見られないわけではない。しかしながら、全体から見れば誤解や誤記はけて多くはない。それどころか、他の旅行記に比べ、ベンジャミン個人が見えてこないことに驚く。彼の旅行の記録は驚くほどに自画自賛もなく、誇張もないからである。中世ユダヤ社会とイスラム世界を記録した旅行家として後世に名前を残した所以がある。

(中略) バグダードにはおよそ4万人のユダヤ教徒が住んでいる。彼らはカリフのもとで安全、財産、名誉を保障されている。ユダヤの賢者もおり、ユダヤの律法研究のためにイエシュヴァ【訳注：ユダヤ研究機関・大学】で従事している。バグダードにはイエシュヴァは10校ある。最高権威のイエシュヴァの長はラビ・サムエル・ベン・エリである。ガオン・ヤコブの名で知られている。〔lamed-vav〕

バグダードのユダヤ社会の指導者を列挙しながら、当地のイエシュヴァがカリフの庇護のもとにあることを伝えている。ベンジャミンの記述から、バグダードには当時、28のシナゴグがあったことが分かる。

11. メソポタミア各地の歴訪

(中略) そこから、レーセンと呼ばれたガジガまでは2日の行程だ。そこは大きな町で、5千人のユダヤ教徒が住んでいる。町の中央に大シナゴグであるラッバーフのシナゴグがある。(中略) そこからバビロンまでは1日の行程だ。旧都のバベルがあったところだ。バビロンの遺跡は広さが30ミッリームある。ネブカドネザル王【訳注：2世。バビロン捕囚でユダヤ教徒とは縁が深い。在位BC605-562】の宮殿の遺跡はまだ見ることができるが、人々は蛇やサソリがいるためそこに入るのを恐れている。そのそば、1ミッリームほど離れたところに、ダニエル廟のシナゴグがあり、そこで3千人のユダヤ教徒が祈りを捧げている。それは砕かれた石とレンガで建てられている。シナゴグとネブカドネザル王の宮殿の間にハナニア、ミシャエル、アザリアが投げ込まれたかまどがある。〔mem-bā〕

『旧約聖書』の「ダニエル記」は、バビロン捕囚の悲しい歴史の中であって、賢者ダニエルの物語としてユダヤ教徒に語り継がれてきたものである。ネブカドネザル王の信頼を得て、魔術師を凌駕する様子を伝えているが、実際の史実は伝承とはずいぶん違うことも現在ではよく

知られていることも事実である。⁽⁹⁾ 王の未来を占ったといわれる預言者ダニエルの賢者ぶりははなはだ美化されており、画家ルーベンスもその逸話をもとに「ライオンの住処の中のダニエル」⁽¹⁰⁾ (1618年) を描いている。

そこからヒツラまでは5パラサングだ。そこには1万人のユダヤ教徒が住んでおり、シナゴグも4つある。(中略) そこからバベルの塔までは4ミッリームだ。言葉が分かれた元だ。アグールと呼ばれるレンガで建てられた。土台は2ミッリームあり、塔の広さは40キュービット、長さは200キュービットある。10キュービットごとに階段があり、螺旋型になっていて、塔の頂上まで登ることができる。頂上からは20ミッリームの眺望が得られる。土地は平坦だ。天空から塔の中央に火が放たれ、そこ深くまで燃え上がった。

[mem-gimel]

『旧約聖書』の記述はラビの息子であったベンジャミンの得意とするところであり、バベルの塔(『創世記』第11章1～9節)やアグール(『イザヤ書』第27章)の引用は不自然ではないが、ベンジャミンの旅記が明らかに全ユダヤ教徒を対象としていたことを実感させる。羊皮紙で手書きされた聖書は高価であり、ヘブライ語は一般のユダヤ教徒には縁遠い存在であったはずだが、『旧約聖書』の逸話はユダヤ社会にとっては常識の範疇であったことを伝えている。

また、メソポタミアはバビロン捕囚以来、ユダヤ教徒とはゆかりのある地である。もともと、ラーダーニーヤ商人たちはスペインから中国まで交易に出かけた際、メソポタミアとインドを重要な中継地として活用したことが知られている。メソポタミアは、ペルシャ湾への入り口であったというだけでなく、とりわけ北部は重要な農業地であり、カリフの支配が直接、行き届くところでもあった。ユダヤ教徒の数が桁違いに多いのもそのことが関係している。

そこからカフリまでは半日の行程だ。そこには200人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。ラビ・イツハク・ナブツァのシナゴグがあり、ラビの遺体はシナゴグの前に安置されている。そこから預言者エゼキエルのシナゴグまでは3パラサングだ。そこはユーフラテス川沿いにある。シナゴグの目の前に、60の小塔があり、それぞれの小塔の間にシナゴグが1つある。シナゴグの真ん中にはアーチ門がある。シナゴグの背後にはエゼキエルの霊廟がある。カフリはその昔ユダヤ王であるエコニア王によって建設された。王といっしょに3万5千人のユダヤ教徒がこの町に来た。(中略) エゼキエルの墓の上には日夜、ランプが点っている。エゼキエル自身がランプに点火してから、けして消されることはない。人々はろうそくを取替え、油を付け足している。[mem-gimel]

カフリの記述はメソポタミアのユダヤ都市としてはけして大きなわけではない。しかし、記載は他のユダヤ都市よりも詳細である。滞在が長かったことも想定されるが、ベンジャミンの

記述からユダヤ教徒のある種の特徴を窺い知ることができる。それは、『旧約聖書』の記述をごく最近の身近な事実として引用することである。誇大妄想とでも思えるほどの生々しい引用ぶりだ。確かにイスラム教徒にとってのコーラン、キリスト教徒にとっての新約聖書もその種の引用がされないわけではなく、唯一神教の特徴といってしまうまでもだが、それにしても記述は具体的にして生活感のある描写なのである。ペサパ（過ぎ越しの祭り）やスッコート（仮庵の祭り）などのたびに子供のころから語り聞いてきたハガッダーの挿絵がそのまま映し出されているかのようだ。その意味で、バビロン捕囚はユダヤ教を生み出した歴史的イベントであり、メソポタミアはベンジャミンを含めてユダヤ教徒にとって重要性をもってくるのであろう。

（カフリから）コツォナオまでは3ミッリームだ。そこに300人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。その町にはラブ・パパ、ラブ・フナ、ヨセフ・シナイ、それにラブ・ヨセフ・ベン・ハマの銅像がある。それぞれのところにシナゴークがあり、ユダヤ教徒が祈りに来ている。そこからアイン・シパまでは3パラサングだ。預言者ナフムの霊廟がある町だ。そこからケファル・アル・カラムまでは1日の行程だ。そこはラブ・ヒスダイ、ラビ・アザリヤ、ラビ・アキバ、ラビ・ドーサの霊廟がある。そこから砂漠にある村へは半日の行程だ。そこは、ラビ・ダヴィド、ラビ・イエフダ、ラビ・アバイ、ラビ・クルディア、ラブ・セショラ、ラブ・アダが埋葬された村である。、そこから1日でクーファに着く。そこにはエコニア王の霊廟がある。大きな建物で、前にシナゴークがある。7千人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。クーファには大きなイスラム教徒のモスクがあり、そこに預言者ムハンマドの甥のアリー・ベン・アブータールが埋葬されたため、イスラム教徒たちの来訪が絶えない。〔mem-hē〕

シーア派ゆかりの地であり、バスラと並び当時イスラムの学問の中心地であったクーファの記述はいたって簡単である。しかも、ユダヤ教徒は7千人ほど住んでいるはずのユダヤ都市なのである。この記述のアンバランスはベンジャミンの趣向に偏りがあるのか、あるいは他の理由があるのか、考察するに値する。では、ユダヤ学問の中心地スーラはどうか？ ベンジャミンはクーファからスーラに向かっている。

ここからスーラまでは1日半の行程だ。メタ・メハスヤとも呼ばれ、（バビロン）捕囚のときの首長と（歴代の）イエシュヴァの長が最初に居住したところだ。ここにはラビ・シェリア、ラビ・ハイとその痛ましい記憶の息子の廟がある。また、ファイユーム出身のラビ・サアディアやラブ・サムエル、ホフニ・ハコヘン、ゼファニアの廟もある。クシの息子や預言者ガダリアの息子、さらに歴代のイエシュヴァの長の廟がある。彼らは町が破壊される前、スーラに住んでいた。〔mem-vav〕

スーラの記述はユダヤ史の重要性から省みると、いたって簡単である。すでに町が破壊された後であったことも、ガオンの中のガオンを輩出したスーラの威光はすでになかったことも大きく関係していることを示唆している。それとともに、メソポタミアの記録は他の地域とある種の違いも見せている。それはユダヤ史を飾る著名人たちの廟についての詳細な記録である。墓参する人も少なくなかったことも関係していると思われるが、もともと死に対する独特の世界観をもってきたメソポタミアやエジプトでは墓に対するある種のこだわりが見られてきた。イスラムが誇大な墓を拒否する一方で、現在までエジプトでは豪勢な墓が建てられてきた。バビロニア神話の特色は死後の復活であり、それはタンムーズ神話からギリシャのアドニス神話へ引き継がれた。フェニックスは不死鳥として500年後に復活するし、神の化身であるエジプトのファラオは肉体の復活を信じてミイラにしたのである。ここに見られるのは靈魂と肉体の分離ではなく、死後の肉体の復活なのである。土葬文化はここから生じたわけで、それと異なるのがゾロアスター教の鳥葬なのである。ユダヤ教は最後の審判を信じる終末観をもつから、現世の肉体の復活はありえない。しかし、一方で墓に対する固執が見られてきたのも事実である。とりわけ、ユダヤ教徒の活発な活動が見られた時代の著名人たちへの望郷はすさまじいものがあり、それはしばしば誇大妄想に近い幻覚を感じることもなっていると思われる。

ここから、2日でシャフィーティーブに着く。そこにはエルサレムの土地とそこの石を運んで建てられたシナゴグがある。シャフィーティーブと呼んだのはネハルディアの人たちである。そこからアル・アンバルまでは1日半の行程だ。そこはネハルディアではブンバディテであった。3千人ほどのユダヤ教徒が住んでいた。ユーフラテス川沿いにある。ここにはラブとサムエルのシナゴグがある。イエシュヴァもそこにあり、彼らの墓もその前にある。[mem-vav]

かつてガオンの時代に一世を風靡したスーラとともに歴史に名を残したブンバディテの記述も驚くほどあっさりしている。

ここからヒーラまでは5日の行程だ。砂漠を21日かけて通り抜けるとサバの地に着く。アル＝イエメンとも呼ばれている。北に向かうとシナルの地が隣接している。[mem-vav]

12. ベンジャミンの旅の動機

インド洋を目前にしたベンジャミンはメソポタミアを離れ、イエメンに向かったようだ。ユダヤ教徒が多く住むようになったのは、スペインを追われた1492年以降であったとしても、イ

エメンはもともとユダヤ教徒には馴染みある土地である。

それにしても、ベンジャミンは記述したすべての土地や町を訪れたわけでは必ずしもないであろう。ベンジャミンの校訂者や西欧語の訳者たちもそのことは随所に注記している。そして、ユダヤ教徒であったこと、ユダヤのコミュニティが商業を軸にネットワーク化されていたことを前提にすれば、ベンジャミンが商人であったことも間違いないであろう。そして、彼の記述がいくつかの動機によって書かれたことも推定できる。ベンジャミンの旅行が最後に近づく前にその点を整理しておこうと思う。

1. 書き魔でもあるユダヤ教徒の習慣性

これについてはいくつかの疑問がないわけではない。旅行記としてはけして長いものでなく、それにしては旅行は長期に及んでいるのである。どちらかという、メモに近いから、よくいうストレス発散で書いたわけでもないだろう。だからこそ、周囲に対する不平不満が少なく、イスラムに対してもたいへん好意的である。むしろキリスト教に対して批判的なのは、そのままトゥデーラでの体験が裏打ちされているためかもしれない。

2. 各地で見聞した好奇心

これについては興味ある記述となっている。自分の感情はほとんど表面に出さず、客観的に描いているのである。その意味で、ベンジャミンの記録はユダヤ社会だけではなく、彼が滞在したキリスト教世界、イスラム世界の生活誌になっている。

3. 旅行ガイドブックの必要性

ユダヤ社会の指導者たちの記載はメソポタミアに来て、なくなった。トゥデーラから行くにはすでに遠方になりすぎていたのであろう。その意味で、彼の旅行の記録は2つの要素をもっている。実際に行くかもしれない地域に対する情報の提供と旅行への衝動を与える刺激的題材の提供とである。当地への日数は実際に役立つ情報として必ず紹介されている。メソポタミアのユダヤ教徒の往時の指導者の名前がいくつかしか記載されていないのは、不自然であるとともに疑問も生じないわけではない。

4. 後世に名前を残す

ラビの息子が商人になったのは、学問に向かなかつたと判断されたためかもしれないが、彼には兄弟がいて、ラビ職は長男あたりが継いだと考えるのが妥当であろう。旅する人たちに中間子が多いことは想定がつく。彼の旅行がもともとトゥデーラ脱出の意味をもっていたとするならば、旅行の記録を後世に残すことによって、20年近くを費やした旅行を正当化する意味をもっていたとも思われる。

(注)

- (1) Jose Ramon Magalena Nom de Deu, *Libro de Viajes de Benjamin de Tudela, Barcelona*, 1989, p.89, Haim Harboun, *Les Voyageurs juifs du XIIe siècle-Benjamin de Tudele*, Aix-en-Provence, 1986, p.235
- (2) C.E. Bosworth, *Islamic Surveys 5 – The Islamic Dynasties, Edinburgh*, 1967, p.7. 先代のカリフのムクタールは西暦にすると1160年3月11日に亡くなっており、アル＝ムスタンジドの治世は1170年12月13日までであるから、アル＝ムスタンジドの時代にバグダードに滞在していたと推察できる。
- (3) アナール派の碩学たちを引用するまでもなく、歴史は支配者・統治者が記述した記録に依存してきた。残された史書の多くが支配王朝を庇護する目的で書かれたからである。戦争や抗争の時代であっても人々は生きるために働き、生活してきた。旅行記は支配者・統治者と一定の距離を置くことができたため、貴重な記録である。「人類学者よりも言語に拘束される歴史家は、少なくとも、語られることと語られないことを隔てている境界を見つけだす努力をしなければならないし、あまりに日常的なことは多くの場合語られないのだということも知っておく必要がある。」(アラン・コルバン, 小倉孝誠・野村正人・小倉和子訳『時間・欲望・恐怖』, 藤原書店, 1993年, 282頁)
- (4) Israel Abrahams, *Jewish Life in the Middle Age*, New York, 1896, p.215
- (5) Elkan Nathan Adler, *Jewish Travellers in the Middle Ages – 19 Firsthand Accounts*, New York, 1987, p.2, *Encyclopedia Judaica*, vol.13, p.1495
- (6) G. Le Strange, *Baghdad during the Abbasid Caliphate*, Oxford, 1900, p.332, Aly Mazaheri, *La vie quotidienne des musulmanes au moyen âge*, Paris, 1951, p.303
- (7) Israel Abrahams, *op.cit.*, p. 217
- (8) *ibid.*, p.217
- (9) *Encyclopedia Judaica*, vol.5, p.1282, Jerusalem, 1972
- (10) “Daniel in the Lion’s Den”, National Gallery of Art (Washington D.C.)